

2020年9月6日(日)  
福山バプテスト教会主日家庭礼拝の手引き

## 1 礼拝の進め方

礼拝プログラムは次のとおりです。このプログラムに沿って、賛美を献げ、祈り、聖書を読みましょう。宣教の部分は説教を読みましょう。

## 2 礼拝プログラム

聖書1 新約聖書 ローマの信徒への手紙4章16～25節

賛美 新生59 父の神よ 汝がまこと

(または) 新生301 いかなる恵みぞ

個々の祈り \*自由にお祈りを献げましょう

主の祈り

聖書2 旧約聖書 創世記15章1～6節

宣教 「誠実」

献げもの 新生658 このささげものを(B) 又は 新生51 かみさまありがとう

\*賛美の後に、感謝の献げものとお祈りを献げましょう

賛美 新生讃美歌 674 父 み子 聖霊の

黙 禱

## 3 説教「誠実」

■誠実な神 先々週ご一緒にわかちあいました創世記12章の続きとして、今朝は創世記15章をとりあげています。前回のテーマは「信頼」、今朝のテーマは「誠実」です。

♪ 主のまことは、満ち溢れて

朝ごとにあらたなり

♪

主、神様のまことを讃美歌は喜び歌っています。神様のまこと。あるいは、神様の真実ともいう。そして皆さん、この「まこと」「真実」という言葉は、実は「誠実」という意味で使われていることに気が付いておられるでしょうか？讃美歌はこう歌っているのです。

「神様の誠実さは、満ち溢れて変わることがない。神様の誠実さは、いつもひたむきで裏表がなく、まるで朝ごとに生まれ出るかのような新鮮さをもって、日々私達に迫る。」

「誠実な神様」とか「神様の誠実さ」という表現は、普通は使われません。「誠実」という言葉は本来、目下か同等の者に対しては使う言葉です。敬語を大切にする日本語においては、「誠実」という単語を目上の人に使うのは適切ではないという語感があります。だから聖書も讚美歌も、「まこと」とか「真実」という言葉で言い換えをします。でも、今日は敢えて「神様の誠実さ」という言い方をさせていただきます。

■「恐れるな、アブラムよ」 今日の箇所、創世記 15 章の 1 節です。

15:1 これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

恐らくアブラムはその頃、強い不安に苛まれ続けていたのでしょう。不安のあまり、夜もろくに眠れなかったのかもしれませんが。何がそんなに不安なのか？直前の 14 章を読むと想像がつかます。彼は捕らわれていた自分の甥、ロトを救出するために、地域の国々——といっても今で言う国家ではなく、「豪族」と言っても良い程度の小さな国々だと思えますが——それらの連合軍との戦いを終えたばかりでありました。国々との戦いですから、つまり戦争ですね。アブラム家とそれに仕える使用人やしもべたちだけで勝利を収めたというのですから、それは大変驚くべきことではあります。でも敗北した国々が滅びたわけではありません。いつか勢力を取り戻します。とすれば、いつか復讐してくる可能性が大いにあります。その時アブラムを守ってくれる国はありません。彼はどこかの国に属する住民ではなく、旅人だからです。

「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

■疑念と不満 わかっています。あなたは私の神。どんな国々やその軍勢よりも力ある方。あなたはきっとそれらの国々から私を守って下さることでしょう。アブラムは心の中で、そう叫んだのではないのでしょうか？しかし、しかしです。神様が語られた最後の言葉には、彼もひとこと返さずにいられませんでした。

15:2 アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」

15:3 アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」

前回 8 月 23 日の説教でとりあげました創世記 12 章、主がアブラムに語られた約束を思い起こします。

12:1 主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。

12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。…」

神様、わたしに何をくださるといいますか？あの時あなたは「わたしを大いなる国民にする」とおっしゃられました。でも、私達夫婦には子供が生まれません。見て下さい。私には子孫がないのですよ。だから、しもべのエリエゼルに跡を継がせるしかないではないですか！

15:3 御覧下さい、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから…

■驚くべき答え アブラムの言葉には、神様のみ言葉に対する疑念の思いが込められています。自分はみ言葉だけを信じて今日まで頑張ってきた。旅人が経験するあらゆる苦労や危険、不安をこうして乗り越えてきたのに、今の自分がおかれたこの惨めさは何だ…という不満さえも感じられます。ところがです。驚くべき言葉が神様から返ってきました。

15:4 見よ、主の言葉があった。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

15:5 主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

驚かされるだけではありません。描かれた情景の美しさには、読むたびに心打たれます。聖書の中でも最も美しい場面の一つです。アブラムは神様に不満を言いました。しかしそれは、神様を信頼しているが故に出てきた不満であり、疑念であったことが、この情景から察せられます。この星空を見上げる場面が示しているのは、神様とアブラムとにある心の絆です。アブラムは神様に深い信頼を寄せています。それもにわかに得たものではない、何十年もの月日をかけて培われてきた信頼です。一方、神様からアブラムに対して向けられているのが誠実さです。「愛」を向けておられると言うこともできますが、ここでは特に、その誠実さというところに注目します。

♪ 主のまこと [誠実さ] は、満ち溢れて 朝ごとにあらたなり  
良きものもて満たしたもう 大いなるかなわが主よ ♪

■誠実、信頼、そして義 誠実な人。裏表が全くなく、口にした約束は決して破らない。たとえ自分に不利なことが起きたとしても、約束したことは必ず実行する。そのようにして常に善意をもって自分に接してくれる人。私達が心から信頼できる人とは、そういう人

です。本当の誠実さがあるからこそ、本当の信頼が存在します。そして神様こそは、その本当の誠実さ、どんな約束をも100%違ふことのない完全な誠実さをもっておられる唯一のお方なのです。

15:5 主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

15:6 アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

アブラムは主を信じた。神様が存在していることを信じたという意味ではありません。今、神様が示された約束を信じたという意味です。それまで培ってきた神様への信頼を失うことなく、生と死を超えた超自然的な約束さえも神様は必ず実行してくださることを確信した、と言うことです。神様の私達に対する誠実さがあります。私達が神様に向ける信頼があります。神の誠実さと人間の信頼とががっちり組み合わさった時に生まれるものがあります。それが6節にある「義」です。「義」とは正しい関係にあるという意味です。

神様が誠実な方であり、またご自身が誠実であることを非常に重んじておられることを示すエピソードが、15章17節に書かれています。

15:17 日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。

犠牲の動物を縦に真っ二つに裂き、それを地面に並べる。その間を契約の当事者双方が歩いて通り過ぎる。当時の中近東社会における風習として、それは、もし当事者のどちらかが契約を破ったら、その者は呪いを受け、裂かれた動物のような罰を受けるという誓いを意味しているとのことです。この17節に出てくる煙を吐く炉と燃える松明は、神様ご自身を表しています。裂かれた動物の間を通り過ぎたのは神様だけです。神様にご自身に対して、一方的に契約の呪いを背負われたという意味になります。何と驚くべきことでしょうか？何と驚くべき誠実さでしょうか？

■わたしたちが義とされるために 旧約聖書と新約聖書全体が私達に伝えようとしているのは、神様の誠実さです。何千年もの歴史の中に刻まれた神の誠実さ、それが聖書です。その誠実さの頂点にキリスト・イエス様の十字架と復活があります。神様はわたしたち人間に対してとことんまで誠実であられるが故に、イエス・キリストとしてこの世に現れ、十字架の上で死に、私たちを救い出して下さったのです。神様が誠実な方だということが理解できれば、私達に必要なのは神様への信頼なのだということがわかります。それが人間と神様との正しい関係だからです。皆さん、信頼、信頼、信頼です！イエス様に信頼しましょう。そのみ言葉を信じ、しがみつきましょう。アブラハムのように、ただ信じましょう。どこまでも誠実なる神様は、必ず私達をこの上なき救いに導いて下さいます。